http://aosa-eye.org

アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

2023 年活動報告（2023 年４月～2024 年３月）　No. 16

2024 年 4 月発行

（シモイオ近郊にて内藤　毅撮影）

アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
2023 年モザンビークアイキャンプ日記 ……内藤　毅４
2023 年アイキャンプ報告……田上純真５
第 13 回アイキャンプに参加して……宝山晶子６
2023 年アイキャンプに参加して……沼田美紀６
アイキャンプ報告 ……田路篤輝７
アイキャンプ報告 ……牟田　薫８
アイキャンプ 2023 に参加して……金田将裕８
アイキャンプ報告 ……加藤美希９
久しぶりのアイキャンプ ……井口博之９
AOSA 黎明期の思い出……荒井紳一 10
Ⅲ．2023 年度事業報告 ……10
Ⅳ．2023 年度会計報告 ……11
Ⅴ．2024 年度事業計画 ……12
Ⅵ．2024 年度予算案 ……13
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……14
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……15

（2023 年のアイキャンプ終了時の記念写真、シモイオにて）

Ⅰ．巻頭言

新たな課題

AOSA 理事長
徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
内藤　毅

コロナ禍でモザンビーク共和国（以下モザンビーク）での現地活動を中断していましたが、やっと活動が再開出来ました。2008 年にモザンビークへの眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）を設立し、現在まで現地で毎年医療活動（アイキャンプ）を行ってきました。しかし 2020 年からはコロナ禍のため現地でのアイキャンプを行うことは不可能でした。

2022 年秋から、やっとコロナ禍が収束傾向となり、海外旅行の規制が緩和され、2023 年 5 月には新型コロナウイルス感染症が 2 類から 5 類に移行されると共に様々な規制が緩和され、やっとアイキャンプが実施可能となりました。

モザンビークなどの発展途上国では医療体制が脆弱で、現地での技術移転が極めて重要で、実際に現地での技術指導が必要です。2023 年はアイキャンプが再開され技術指導も再開できました。

現地活動は中断していた間も、我々が継続して技術指導し、手術技術を習得した眼科医がシャイシャイ病院で白内障手術を積極的に行っていて、現地の医療状況の改善に大きな力となっています。しかし、モザンビークの経済状況の悪化による医療物資の不足は彼らの活動にとって一番の障壁の様に思われます。さらに経済状況は悪化しているようで医療従事者に対する給与の支払いも滞りがちと聞いています。

我々の目的はモザンビークの眼科医の医療技術が向上し、独自にアイキャンプなどの僻地医療を行う事が出来るようになり、モザンビークの眼科医療が少しでも改善することです。しかし経済状況の悪化は新たな障壁となっています。医療物資の不足に関しては我々の力ではなかなか困難ですが、微力ながら物資の確保に努力したいと考えています。

コロナ禍で国際協力の活動が制約される中、現地の人々も独自に努力しています。我々が今まで技術指導してきた眼科医が指導者となり、さらに世代交代により彼らの活動は自発的に活発になり、良い方向に発展しているように思えます。

今年は昨年に引き続き、現地での活動を行う予定です。すでにアイキャンプの日程も決まり現地と調整に入っています。経済状況の悪化の中、どのように活動を行うかという新たな課題の中、慎重に状況を見ながら、安全に活動をできたらと考えています。日本の代表の一人として微力ながら国際貢献を継続する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（シモイオ病院で活躍するマリオ先生）

（次世代を担うモザンビーク人眼科医たち）

Ⅱ．活動の現場から

2023 年モザンビークアイキャンプ日記

徳島大学　内藤　毅

5月に新型コロナウイルス感染症が2類から5類に移行されると共に様々な規制が緩和され、やっとアイキャンプが実施可能となった。 2019年にアイキャンプを行ったのが最後で、その後準備はしていたが実際に現地には行くことができなかった。現地との連絡はとってきたが、現地活動ができないことは大変残念であった。

この３年間で、現地の状況も変化してきた。我々が支援してきた若手の眼科医たちが成長し、指導者的立場へと成長した。それに伴い、時々手際の悪い面も見えたが、彼らなりに頑張っている。しかし、モザンビークの経済状態は悪化し、公務員の給料削減が行われ、特に医療従事者の給料削減は顕著であり、アイキャンプ直前まで医療従事者のストが続いていた。このため、現地での患者を集めることも十分行われてなく、情報もないままにアイキャンプを迎えた。また、アイキャンプの候補地も二転三転し、最終的にマニカ州のシモイオに決まったのは７月になってからであった。

8月23日（水）夕方の成田空港に全員集合した。今回は私の他に、田上先生（種子島医療センター）、沼田看護師（茨城県）、カメラマンの井口さん（大阪市）であった。事前に成田空港に送った医療機材の入った段ボール箱（４箱）を受け取り、エチオピア航空にチェックインした。超過料金を請求されると思っていたが、意外と大丈夫であった。定刻通りに成田を発ち、ソウルを経由して、エチオピアのアジスアベバに向かった。

8月24日（木）早朝のアジスアベバに到着した。ここで乗り換えモザンビークの第２の都市ベイラへ向かった。定刻よりは遅れたが快適な飛行で午後４時頃ベイラに到着した。ベイラでは入国審査で手荷物に関しての質問を受けたが、保健省からの活動許可証を見せたので特に問題はなかった。今年から事前にビザを取得する必要がなくなったのでかなり簡素化された。空港にはベイラ在住の宝山さんが出迎えにきてくださった。

8月25日（金）朝８時にチャーターした大型バスでホテルを出発した。宝山さんの自宅に寄って、保管してもらっている機材を積み込み、目的地のマニカ州のシモイオに向かった。ベイラからシモイオへは中国が建設したハイウエイを経由して行き快適であった。アフリカでは中国によるインフラ建設が凄まじい。昼過ぎにシモイオに到着し、早速シモイオ病院で医療機材を下ろした。病院の関係者と面会しアイキャンプに関して話をした。

8月26日（土）アイキャンプ初日。朝８時過ぎに病院に行ってみるとたくさんの患者さんが待っていた。病院長にアイキャンプの受け入れの感謝を伝えてから、早速診察の準備をした。約100名の患者さんを診察して両眼失明者を優先し、56名の白内障手術患者を選出した。その後翌日の手術に備えて物品を整理した。また手術用の顕微鏡も組み立てて日程を終了した。思ったよりスムーズに進行した。

（待っていた患者さん）

8月27日（日）天気予報通り曇り空で雨が降り出しそうであった。８時に病院に到着し早速手術準備に取り掛かるが、昨日来ていない患者が診てくれと言って数名来たので、診察してから手術室の設営をした。手術初日なので手間取り、手術を開始したのは12時近かった。眼内レンズを取り出したり、必要な物品を取り出すためには人手が足りないため、私は手術をせずマネージメントに徹した。田上先生とモザンビーク人眼科医のマリオ先生に手術をしてもらった。マリオ先生の手術を見るのは初めてであるが、なかなか良い感じであった。しかし意外と時間がかかり25例の白内障手術を終了したのは夜8時頃となった。その後、器具を洗浄し、翌日の手術に備えて滅菌を頼んで日程を終了した。

（手術風景）

8月28日（月）前日の手術患者を診察したが概ね良好であった。視力が回復して喜ぶ人々の笑顔が嬉しい。回診後に手術を開始し、夕方までに22例の白内障手術を終了した。本来なら25例の手術予定であったが、来ていない患者が3名いた。今日も私はマネージメントに徹し、手術をしない予定であったが、今日は終了間際に3例することができた。

8月29日（火）前日の手術患者の診察を終えてから手術を開始した。急遽、手術をしてほしいという患者も現れ、術前検査を追加した。10例の白内障手術を行い、昼頃に手術を終了した。今回のアイキャンプでは合計57例の白内障手術を行った。手術終了後は翌年の活動に備えて荷物を整理した。

8月30日（水）前日の手術患者の診察をしたが術後経過は良好であった。我々は手術経験が豊富であり結果が安定している。その後、ベイラに向けての出発準備をした。バスに全ての荷物を積み込み午後1時頃にベイラに向けて出発した。道中でカシューナッツを土産として買い込んだ。モザンビークのカシューナッツはとても美味しく土産に最適だ。夕方にベイラに到着し、宝山さんの運営する学校を見学させてもらったが、元気な子供達にエネルギーをもらった。

8月31日（木）午後のエチオピア航空便でアジスアベバを経由して帰国の途に着いた。

9月1日（金）夜、成田空港に帰国した。

今回のアイキャンプは,コロナ禍で３年間の中断、そしてモザンビークの経済破綻による医療従事者に対する給料未払いからのストライキと厳しい状況であったが、無事終了することができた。今回のアイキャンプに参加してくれたモザンビーク人スタッフには日給を支給した。今までは保健省が払ってきたが財政難のため仕方ない。来年は状況が改善していることを願っている。

2023 年アイキャンプ報告
種子島医療センター　眼科　田上純真

2023 年 8 月、内藤先生からのお便りを頂いて、自身では三回目となるモザンビークアイキャンプに参加しました。過去二回の活動のことを思い返してみると大した働きもできていなかったので、私にお声がかかるとは正直思っていませんでした。

一回目のアイキャンプでは三名の素晴らしい先生方のメスさばきに感動して、こんなに大変なんだと思いながらも現地での活動に無我夢中でした。二回目は、先生方にチームの一員として認められたい一心で、やってやるぞと意気込んでいましたが、手術においては自身の不甲斐なさにただただ砂をかむ思いでした。今回はどんな旅になるのだろう。期待と不安が互い違いに頭をよぎりながら、渡航の日が近づいていきます。

僕と内藤先生と看護師沼田さんの三名でエチオピアのアジスアベバを経由し、たどり着いたシモイオという内陸北西部の街はアイキャンプとして初めて訪れる場所で、思っていたよりも活気があって栄えている印象でした。現地の病院に到着し、内藤先生の指示に従って淡々と診察や作業を進めていきます。現地にはマリオという眼科医がいて、内藤先生が患者を割り振って一緒に手術をおこなうことになりました。

今回 57 名の方の白内障手術を行いました。先輩の先生方がいらした前回や前々回に比べるとこなした数ははるかに少なくて恥ずかしいのですが、過去二回に比べて術中の対処や術後の状態など、自分の手技についてはある程度改善したのではないでしょうか。

手術の翌朝、集まった患者さんの眼帯を取り除いて診察をしていきます。手術によって失明していた目が視力を取り戻したことを確認すると、経験したことのない魂を揺さぶられるような感情になり、自然に涙がこぼれそうになるのをこらえるのが毎回大変です。でも、ほほ笑む患者さんと両手を握りあって喜びを分かちあう、そのつかの間の対面が終われば僕たちはもう二度と会うことはありません。手術を受けたモザンビークの方々が、これから少しでも豊かな日々を過ごされるように祈りながら、現地をあとにして帰国の途に着くのでした。医療を通じてアフリカの人々と触れ合い、ほんの一瞬だけど一緒に喜びを分かち合うことや、内藤先生の行動力や情熱を身近にいて体感することは、これからの人生に必ず勇気を与えてくださるものであると信じています。

（手術後の患者さんと田上）

アフリカそしてモザンビークは素晴らしいところです。生活水準の違いはあれど、町を行き交う人々や子供たちはそれぞれが希望をもって毎日を生き生きと一生懸命に暮らしているように見えます。アジスアベバやドバイといった中継地の大きな空港は、それぞれの旅路へ向かう無数の人々でいつも溢れかえっていて、数え切れない人生の息づかいがリアルタ

イムで体感できます。そんな異国のツンと鼻をくすぐる匂いに満ちた混沌と自分のありふれた日常との対比がとても面白くて、僕は旅が大好きになりました。僕には医師としてまだまだできることがあるはずだし、恐れず行動することで思いがけない出会いや経験を手に入れることができると思う。モザンビークでの経験を活かして、またいつか遥かな旅に出られるように日々の診療を頑張っていきます。

内藤先生、宝山先生、沼田さん、現地で手伝ってくださったJICAのみなさん、今回も本当にありがとうございました。そして関わってくださったアフリカの皆さま、これからもどうかお元気で。

第13回　アイキャンプに参加して

モザンビーク　宝山晶子

これほど心配が多かった年はない。保健省から、アイキャンプの経験が全くないマニカ州に行ってもらえないか、と打診されたのは確か今年の３月くらいだった。「ただし。保健省の予算が全くないので、全費用を日本側でもってもらうことになると思うが」とのことだった。例年なら、白内障患者集めの費用や、患者たちの食費、アイキャンプに携わる医療関係者の労働手当などは、保健省が支払っていた。だが、今年は違うというのだ。

アイキャンプをするには、保健大臣から活動許可をとらなければならない。許可がとれたということは、保健省とのコラボということで、全費用を日本側がもつなどは、考えられないことだった。

関係筋の話では。保健省は医療関係者に対し、基本給の半額ほどしか支払わず、残業代や医療リスクに対する手当もすべてカットしていた。そのため、公立病院の医師はじめ医療関係者は、全国規模のストを決行するようになった。ベイラ市だけで一か月に500人以上の助かるはずの人々が命を落とした。10月には選挙を控えており、医療関係者の給与の削減分が、与党モザンビーク解放戦線（FRELIMO）の選挙対策資金に回されているとのうわさがたっていた。

月を経るごとに、状況は悪化する一方だった。８月末には日本から眼科医一行がくるのに、患者がいないというのでは話にならない。何度も何度も受け入れ病院側に連絡をとったが、彼らが患者集めに動く気配はなかった。

眠られない夜が続いたが、内藤先生から、「患者の数が問題ではない。アイキャンプをすることに意義がある。しなければ、前に進めない」といわれ、ずいぶん救われた。

日本から、種子島医療センターの眼科部長、田上純真先生にご参加いただいた。先生のお父さんは、種子島にはじめて病院を開いた功労者である。日本ではめったにみられない過熟白内障患者に対する手術を学び、種子島にいる同様の患者さんの治療に役立てたいという思いで、このアイキャンプに参加されたようだ。

眼科看護師の沼田美紀さんは、手術器具を眼科医に手渡す役割をはたされたが、現地の眼科医マリオさんは、「これほどの優れた仕事ぶりをみたことがない」と絶賛していた。

モザンビーク JICA（国際協力機構）にもご協力をいただき、４名の青年海外協力隊員を送っていただいた。皆、献身的に患者さんの誘導等にがんばってくれた。

以下は、2008年からのアイキャンプの手術患者数の一覧である。

実施年	手術患者数	実施場所	医療機関
2008	47	カボデルガド州	ムエダ地区病院
2009	58	カボデルガド州	ムエダ地区病院
2010	113	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2011	153	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2012	208	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2013	173	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2014	121	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2015	169	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2016	210	ガザ州	州立シャイシャイ病院
2017	158	カボデルガド州	州立ペンバ病院
2018	220	ガザ州	州立シャイシャイ病院
2019	216	ガザ州	州立シャイシャイ病院
2023	57	マニカ州	州立シモイオ病院
総数	**1903**		

（患者さんに保護メガネを渡す金田と宝山）

2023年アイキャンプに参加して

山王台病院附属眼科・内科クリニック
看護師　沼田美紀

新型コロナウイルスのために３年出来なかった活動に４年ぶりに参加することができました。今回も色々初めて尽くしでした。まず久しぶりの活動の目的地が今まで行ったことのない場所で、さらに直前

に場所がシモイオ(Chimoio)という都市に変更されました。滞在したホテル周辺はびっしりと建物が建ち、道路や歩道も整備され、行き交う車も人々も多く、観光客にも慣れているのか大きく反応されることもない都会でした。

今回のアイキャンプは参加史上で最少人数でした。成田空港から全員(と言っても 4 人)合流しての旅路は初めてのエチオピア航空の利用。機体が古くリモコンが壊れていて電気はつかない、ディスプレイの操作が出来ない(タッチパネルが反応ない)もちろん乗務員も呼べない状態。喉が渇いたらギャレーまで言って声をかけるが、置いてあるから自由にどうぞとセルフサービスでした。

荷物の多さから現地での移動は(日本で働いた後の)大型観光バスでした。2019 年にまとめておいた荷物と 2020 年の使えなかった活動用の荷物、さらに今回の荷物を合わせるとかなりの量になっていました。さすがに多くて把握しきれず、準備の時点で同じダンボールを何回も開けてしまったり、見つけた物が期限切れのため再捜索をしたりとやや効率の悪い準備でした。次回少しでもやりやすい様にとは思いましたが、活動終了時の梱包も時間があまりなく整理できていないものが多くなってしまいました。次回何か目印などを考えたいと思いました。

病院は小さくはなさそうでしたが、手術室は狭くて顕微鏡とベッド 2 台ずつでいっぱいでした。人も少なく場所もないため出来る限りの物品を先に出したのですが、その場所も狭く物が溢れ返っている状態でした。さらに麻酔や消毒薬、散瞳薬、抗炎症薬等が全て同じシリンジで準備したため、間違えない様にマーキングをし、混ざらない様に気をつけました。ただ、現地での活動の宣伝があまりされておらず、患者さんの人数が少なかったので追いついて行くことができました。

現地でいろいろと物品がないと言われるのは変わらなかったです。Dr 用のグローブやガウンはないが、IOL は棚に一杯に詰め込まれていました。術後回診で目の周りを拭くためにイソジン生食でガーゼを濡らしたいから何か容器(膿盆)をと言ってみましたが何もないと言われました。生食のプラボトルに作ってみたり、綿球の袋で作ってみたり。ある物でなんとかするのもアイキャンプならではと感じました。

こまごまと色々ありましたが、終わってみると「無事に終わって良かった」と思います。不安だったのは自分の体力がついていけるかというところでしたが、それもなんとかなりました。また来年も活動が出来る社会状況である事を願っています。

最後に一緒に活動してくださった皆様お世話になりました。ありがとうございます。送り出して下さった職場の皆様、活動を応援して下さっている皆様、ありがとうございます。今後も活動に関わって行きたいと思っています。

(手術後の患者さんと沼田)

アイキャンプ報告書

JICA 海外協力隊　田路篤輝

JICA 海外協力隊の田路です。普段はモザンビークの首都マプトで、固形廃棄物に関わる活動をしています。

廃棄物の啓発をしていると、明日食べるパンが必要な彼らに「自分の子供達のために廃棄物のことも考えていこうよ」と伝えなければいけないこともあり、心の中に矛盾を抱えながら活動をすることもあります。

そんな中参加したアイキャンプ。目が見えなかった人が、見えるようになる。普段の活動とは異なる、シンプルでとてつもない力に圧倒されました。

参加した理由は単純な興味からでした。しかし、目の前で困っている患者さんたちを見ると力が入ります。荷物の運搬をしたり、現地の看護師の力を借りて日本語ーポルトガル語ーショナ語の翻訳をしたり、自分にできる細かなことを探して奔走した、密度の濃い５日間となりました。

ひとりのボボ（意：おばあちゃん）のことが印象に残っています。彼女は手術台に寝たものの、普段経験することのない雰囲気に怯えてしまい、諦めてベッドを降りてしまいました。しかしその後ボランティアがなだめ、落ち着かせ、話していると「もう一度挑戦したい」と言い、AOSA の皆様のご理解もあり、無事手術を受けることができました。

翌日の診察を終えたボボは視界が開け、嬉しそうに、そして少し恥ずかしそうに、俯きながら微笑んでいました。そんな彼女を見ると込み上げるものがあり、アイキャンプに参加してよかったと心から思ったのをよく覚えています。彼女の肩を抱き「よかったね」と声をかけた経験は、モザンビークで過ごす２年のかけがえのない思い出です。

（患者さんに保護メガネをかけている田路）

貴重な経験、そして普段の活動と異なる角度からモザンビークに貢献する機会を与えてくださったAOSAの皆様、宝山さん、改めましてありがとうございました。

アイキャンプ報告
JICA海外協力隊　牟田　薫

8月25～31日までの7日間、AOSAの取組に参加してきました。

AOSAとは、日本のNGO（アフリカ眼科医療を支援する会）で、2008年からモザンビークにおいて白内障手術の支援を行っているNGO団体です。新型コロナの影響で暫く中断していたこの活動が、今年、マニカ州都シモイオで再開されるということでボランティア参加してきました。

生憎、モザンビークでは医療従事者のストライキ期間中で、現地医療機関による患者集めや、活動中の現地協力もほぼ得られない状況の中での活動になるだろうという前情報。

モザンビークに来て1年、ほぼ休暇を取得していなかったので、休暇を取ってシモイオに前入りし、街中で患者集めをすることから。シャパ乗り場、市場、人通りの多いところで手作りのチラシを配りながら、今回の支援内容を街の人たちに協力してもらって情報を流してもらいました。

現地の人たちの反応は歓迎モード、話した人たちの親族の多くに白内障患者がいることが分かり、それなりの手応えを感じられるものでした。

診察初日、病院の前には早朝から約300人近い人たちが受付を待っていました。(付き添いの家族も含めて)

3日間の受診者100名、手術者57名。
活動中は、患者さんの診察のフォローや手術中の医師の指示を患者さんに伝えたり、現地スタッフに依頼したり等、柔軟な対応が求められる内容でした。

手術の前に、待機している患者さんと雑談しながら緊張をほぐしてもらうも、やはり手術台の上ではガチガチに緊張する患者さんの手をしっかり握りあって一緒に手術を乗り越えた気分になり、1日が終わる頃にはヘトヘトに。

しかし、手術の翌日には患者さんが一人で歩けるようになっている姿や、患者さん本人から「これで働けるようになる」等、医療が届くことで人の未来を拓く力を持っていることを目の当たりにすることができました。

今回得た機会では、私のモザンビークでの活動への思いを更に刺激するものになりました。

（患者さんと牟田）

アイキャンプ2023に参加して
青年海外協力隊　　金田　将裕

この度、マニカ州のシモイオ州立病院にて行われたAOSAのアイキャンプに参加させて頂きました。この日程の数日前まで病院でストライキが行われており、白内障患者の方を集めることが難しいのではないかと心配されていましたが、当日多くの患者さんが集まっているのを見て白内障で困っている人の数の多さに驚きました。

私は普段教育分野で活動をしているので、医療現場に入るのは初めてで、準備、診察、手術の様子など、何もかもが新鮮でした。手術に使う器具がオートクレーブで滅菌されているのを見て安心したりしました。眼科医の内藤先生、田上先生、看護師の沼田さんの清潔な状態を常に保ち続け、手術が始まると休む暇もなく動き続けながらも気さくに話しかけて下さり、緊張感もありながら楽しく過ごすことができました。

私たちは患者さんの誘導や、先生の話す日本語を患者さんにポルトガル語で伝えることが主な役割でしたが、手術の翌日に眼帯を取った患者さんが、自分の目で光を感じることができ涙を流している姿を見たときは、この素晴らしいプロジェクトに微力ながら参加できたことを誇らしく感じました。また、それと同時に日本では誰もが手術をして治すことができる病気でも、モザンビークでは手術できずにいる現

実を突きつけられました。
　分野は異なりますが、私も教育分野で現地の人達のためにできることを自分なりに模索しながら残りの活動を頑張っていきたいと思いました。貴重な機会を頂き本当にありがとうございました。

（患者さんに点眼液を渡す金田）

アイキャンプ報告書

青年海外協力隊　加藤美希

　とても貴重な体験をさせていただき、日本人のみなさんにもモザンビークのみなさんにも、とても感謝しています。充実した日々をありがとうございました。
　モザンビーク人のやり方や対応を見て、日本とは方法は違えどこだわりやルールをきちんと守りたいという気持ちが強いところが見えて、やはり日本とモザンビーク人は似ていると思いました。ただ多くの時間をモザンビーク人看護師と待機室で過ごし、働き方の違いは、やっぱりモザンビークだなぁと思いました。座っておしゃべりしているようで常にマリオ先生の呼びかけには耳をそばだてているし、私達が言語や対応がスムーズにいかないときは、すぐに助けてくれたりと、多くのことを学ばせてもらいました。また、JICA ボランティアとしてはコミュニティ開発の隊員であるため、なぜ白内障の手術なんだろう、それよりも基本的な生活の向上を応援したいなぁと思う瞬間もあったけれど、術後に涙を流して喜ぶ患者さんを見て、白内障治療の発展が、医療の質の向上のきっかけになったらいいなぁと思いました。
　患者さんたちの無事の回復と先生方のますますのご活躍を願っています。

（患者さんに説明する加藤）

久しぶりのアイキャンプ！

大阪市　井口博之

　コロナ禍のため現地での医療活動が３年連続で中止となったのは初めてである。今年は 4 年ぶりの現地でのアイキャンプに参加でき、喜ぶ患者さんの顔を見ることができて良かった。現地で視力を回復した患者さんの喜ぶ顔を見るのは大変うれしいことで、アイキャンプを続ける意義でもある。医療の行き届かないモザンビークではコロナ禍の影響も厳しかったであろうと想像するが、さらに経済状況の悪化により、目の見えない患者さんたちの生活はさらに厳しい状況になっているのではないかと気になっている。
　今年は現地での活動が再開されることになったので参加したが、今後も AOSA の活動に協力していきたいのでご支援よろしくお願いします。

（いつも元気な井口、後列左二人目）

AOSA 黎明期の思い出

あらい眼科　荒井紳一

「今度、アフリカのモザンビークに行こうと思って」内藤先生と初めてお会いしたのは 2007 年 1 月、アジア眼科医療協力会主催が主催したヒマラヤ山麓でのアイキャンプから帰国して、打ち上げの席だったと思う。

アフリカ！！　バックパッカーに憧れた学生時代から、いつかは訪れたいと思っていた地であった。思わず旅情をかきたてられ、「私もお供させてください」と即答した。

そして同年 8 月には、内藤先生、井口さんと共にモザンビークにいた。宝山さんに手配いただき、現地の病院、医科大学などを視察、モザンビーク保健省、日本大使館でアイキャンプ実施に向けて協議を行い、夜は宝山さんのご自宅で歓待いただいた。

その後の 1 年間は、アフリカでのアイキャンプ実施に向け準備を重ねた。私の所属する新潟大学眼科の阿部教授に活動概要を説明し許可を得ると、AOSA 設立、助成金申請、新聞等での活動周知、寄付金のお願いで奔走し、充実した時間であった。手術用顕微鏡寄贈のお願いで新潟県魚沼市にあるオーヒラさんを訪問したのも良い思い出である。

2008 年 6 月、アフリカの地で初めてとなる AOSA アイキャンプを迎えた。モザンビーク保健省も、同国で初めて活動する日本人グループを試す気持ちもあったのであろう。指定された活動地域は、首都マプトから遠く離れたモザンビーク最北端カボデルガド州で、さらに州都であるペンバから内陸へ陸路で 5 時間の「ムエダ」という地区であった。

陸路はエアコンの効かないマイクロバスで窓全開での悪路走行のため、みんな泥だらけになっていた。宿舎に着いて顔でも洗おうとするが、水道などない。トイレ横のバケツに水が溜めてありこれを使う。最初井戸水かと思っていたら、雨水を溜めたものだとういう。シャワー（水浴び）もこれを使うが、一人バケツ 2 杯程度でお願いしますとの事。現地の人は、この水を濾過・煮沸もせずに飲用水として用いているという。ムエダは標高 1000m に位置し、水の苦労も多いようだった。過酷な環境と思われたが、現地情報に精通する宝山さんのお力で、事前に宿舎との交渉、現地でコック・メイドの手配等をしていただき、我々は快適に滞在できた。

ムエダは黒壇の彫刻（マコンデの彫刻）で知られるマコンデ族の居住地であり、高齢女性の多くは顔に特徴的な刺青をして、さらにリッププラグ（上唇に穴をあけて埋め込むアクセサリー）をつけていた。マコンデ族固有の伝統・風習との事で大変驚き、“アフリカの奥地“に来たと実感した。

見知らぬ地域での初めてのアイキャンプは、その後も多くの困難を克服し、両眼失明状態の患者 47 名（48 眼）の手術を施行した。ムエダでのアイキャンプも無事終了し、首都マプトの日本大使館で活動報告を行うと、大使は夕食会で我々を慰労してくださった。その時に、「日本がアフリカ諸国に財政支援をする力は、以前のようにはありません。その代わりに、AOSA のような人的な支援活動が重要となるのです」と AOSA の活動を評価いただいた事が、大変印象に残っている。

第 2 回、第 3 回とアイキャンプも回を重ねるごとに、モザンビーク人眼科医の参加、海外青年協力隊メンバーの参加、各種検査機器の導入、手術用顕微鏡の増設など活動内容もグレードアップして行った。私自身、AOSA の活動に大きなやりがいを感じ、準備も含めて年 1 回のモザンビークでのアイキャンプが楽しみであった。

2011 年、私は長年勤務した新潟大学を辞し、新潟市内で眼科医院を開業した。以後、残念ながらアイキャンプへの参加はできていない。その後も 10 年以上継続してアイキャンプを続けられている内藤先生のリーダーシップ、メンバーの皆さまの情熱に、改めて敬意を表したい。

Ⅲ．2023 年度事業報告

“アフリカ眼科医療を支援する会”
モザンビーク眼科医療支援 2023

（1）事業実施状況

2008 年からの継続して 12 回の現地医療支援プロジェクト（アイキャンプ）を行なって来た。しかし 2020 年からは新型コロナウイルス感染症パンデミックのためアイキャンプは中止となり、2023 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行したため、2023 年にはアイキャンプを再開することができた。詳しい内容は、アイキャンプ日記を参考にしていただきたい。

（2）事業計画中に生じた課題等と対処内容

① 2023 年の活動準備を早くから行なってきたが、現地に保管する医療機材の使用期限等が把握できにくかった。今までに現地へ送った医療物資は現地在住の日本人コーディネーターの自宅で保管中であり、丁寧に管理されている。しかし経年変化や、使用期限の制約もあり、内藤のネパール渡航時にインド製の眼内レンズやナイフを購入し、購入していた中古の A モードとともに携行した。

② モザンビークへ向けての郵便小包（船便）は現時点で利用できないままである。携行すると超過料金が高額となるが、準備を入念に行ない最小限の物品を携行したため超過料金は発生しなかった。

③ モザンビーク政府が現地医療従事者への給与の支払いが滞っていて我々のアイキャンプの直前ま

でストライキが行われていた。この為、患者を十分に集めることが出来なかった。モザンビーク国内の情勢に関しては、我々は状況に従うのみである。安全第一に考え、できる範囲でアイキャンプを遂行した。その結果手術件数は 57 人という結果となった。

（３）事業の成果

現地でのアイキャンプを再開でき、無事現地活動を行うことが出来た。現地での活動は技術指導という我々の最も重要な活動であり、白内障手術件数は 57 人と少ないが、成果を収めることが出来た。

我々が技術指導してきたモザンビーク人眼科医が指導者的立場となり、独自に事業計画を立てつつある。また、シャイシャイ病院に赴任した眼科医は、独自に白内障手術を行っている。

モザンビークの経済状況の悪化で物資不足が深刻であるため医療物資を現地に残してきたが、今後現地の方々と検討し医療物資の調達方法を模索する必要がある。

（４）広報活動など

①当会のホームページを更新した。さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信している。（ http://aosa-eye.org ）

②2023 年 9 月 26 日、徳島新聞に活動が紹介された。

③2024 年 2 月 4 日、日本眼科手術学会総会(京都)で講演し、活動内容を紹介した

Ⅳ．2023 年度会計報告

収入の部

１．寄附金	1,085,051
２．助成金＊	1,000,000
３．繰越金	4,549,098
４．利息	23
計	6,634,172 円

＊ 助成金内訳

日本眼科医会	500,000
徳島プリンスロータリークラブ	300,000
徳島県眼科医会	100,000
徳島大学眼科同窓会（黒瞳会）	100,000
計	1,000,000 円

支出の部

１．第 13 回モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具・医薬品等	85,206
現地購入医薬品等	174,565
渡航経費補助	668,987
現地病院支援等	60,000
現地物品輸送費等	158,960
現地日本人ボランティア旅費等	234,472
雑費	28,310
計	1,410,500 円

２．その他

日本眼科国際医療協力会議会費	50,440
印刷代（会報など）	97,940
送料	45,510
計	193,890 円

総支出合計	1,604,390 円
次年度繰越金	5,029,782 円
計	6,634,172 円

Ⅴ．2024 年度事業計画
（2024 年４月１日～2025 年３月 31 日）

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 14 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2024

１．事業の趣旨及び目的

過去 13 回の支援プロジェクト結果をもとに第 14 回支援プロジェクトを計画した。

① モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

② 人口約 3,000 万人に対し、眼科医は約 20 名にすぎず、危機的状況である。過去にアイキャンプで技術指導した眼科医がシャイシャイ病院に就職している。彼の技術の上達状況を確認し、彼が発展的に指導者として活躍出来るようにバックアップしたい。さらに、現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、アイキャンプ参加の資金的援助を行い、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。現地の方々と相談し技術支援する方針である。

③ モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

２.事業の内容

過去の活動と同様に、「モザンビーク共和国保健省」と「アフリカ眼科医療を支援する会」との共催でプロジェクトを行う。「モザンビーク共和国保健省」は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師、看護師、眼科助手などの病院スタッフを動員し、我々 NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。「アフリカ眼科医療を支援する会」は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

本プロジェクトは、「在日モザンビーク共和国大使館」、「在モザンビーク日本大使館」、「徳島大学医学部眼科学分野」、「新潟大学医学部眼科学講座」および現地で活動を行っている NGO「モザンビークの学校を支援する会」より支援・協力を受けている。

① “アフリカ眼科医療を支援する会” 第 14 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からは Xai-Xai に近い Bilene での活動要請があった。当初 Xai-Xai でのアイキャンプを計画していたが、Xai-Xai 病院が改築中であり、Bilene での開催を要請された。要請に従って 2023 年８月、第 14 回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画中である。現地に１週間滞在し、白内障による失明患者約 100 名の手術施行を目標としている。日程は以下である。

8/21(水)日本発
8/22(木)モザンビーク（マプト）に到着
8/23(金)陸路、マプト～ビレーネへ移動
8/24(土)～8/27(火)眼科医療活動（診察・手術）
8/28(水)午前：診察、午後：マプトへ移動
8/29(木)帰国の途に
8/30(金)帰国

今回は、日本人眼科医２名に加えて、モザンビーク人眼科医 1 名および眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフケラトメーター、眼軸長測定器をフルに使用してより質の高い手術を行う予定である。

② 眼科専門課程研修希望者の支援

モザンビーク人眼科医の育成が急務であり、この点をモザンビークの関係者に説明しているが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間1－2名のみである。根本的に医師数が限られているので、問題解決には時間を要する。長期的視野に立ち現地で指導するとともに、関係者とともに教育体制を改善するために意見交換をしている。毎年２名の専門課程研修医師をアイキャンプへ招待し技術指導を行なっている。本年も 2 名程度招待する予定で既に連絡している。

３．事業の長期展望

（１）現地の協力

根本的な医師不足のため、特に地方においては病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受けている。我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが出来ると考えている。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を理解してもらうことが出来るようになってきたが時間を要する。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成を支援する必要がある。このためには大学での手術教育の改善強化を試みる必要が

ある。
　これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を強化する必要があり、引き続き連携していく予定である。

（２）将来展望と資金計画

　アイキャンプを継続して行うことで、モザンビーク保健省との信頼関係がより強固なものとなって来た。しかし、モザンビークの経済状況の悪化が医療現場に悪影響が出ている。今後現地の意見を聞きながらさらに発展させて行く必要がある。
　モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。特にモザンビークにおける医療機器の管理体制を強化する必要がある。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく。
　今年はモザンビークの大統領選挙が予定されており、その結果により今後の経済状況や治安状況を詳細に見極め、今後の方針を決定して行く。

広報活動など

　我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。
①ホームページの充実
　広報活動にホームページは不可欠であるため、今年度はさらにホームページを徐々に充実させる予定である。また動画サイトへの投稿なども積極的に行って来たがさらに充実させる予定である。

②眼科学会等での発表
　眼科関連学会等のインストラクションコース等で発表予定である。

Ⅵ. 2024 年度予算

収入の部

寄附金	500,000
助成金	500,000
繰越金	5,030,000
合計	**6,030,000 円**

支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具等	300,000
医薬品等	500,000
渡航費補助	1,200,000
現地移動費等	200,000
現地滞在費等	400,000
雑費	250,000
小計	2,850,000

2. その他

印刷費	150,000
通信費	100,000
雑費	200,000
予備費	2,730,000
小計	3,180,000
合計	**6,030,000 円**

Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2023 年４月１日～2024 年３月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

（徳島県）
糸田川　誠也、井上　須美子、井上　昌幸、
江村　俊二、大村 和正、賀島　誠、香留　崇、
兼松　誠二、川端　昌子、木下　導代、工藤　英治、
篠賀　健、篠賀　知代、塩田　洋、島　裕美、
菅井　哲也、髙橋　順子、武田　美佐、竹林　優、
谷　貴美子、豊永　寛二、内藤　毅、中西　淑子、
中屋　由美子、西内　貴子、仁田　美智子、秦　聡、
秦　裕子、深田　君代、布川　毅、福本　幸司、
藤井　邦隆、藤田　善史、牧野谷　卓宏、三河　洋一、
水井　研治、美馬　彩、盛　隆興、
山口　景子、山田　修三、山根　伸太、吉浪　弘子、
吉村　久
黒瞳会、コンセール合唱団、徳島県眼科医会、
徳島プリンスロータリークラブ

（香川県）
赤澤　嘉彦、小木曽　正博、大豆本　恵里奈、
川口　みさ子、坂口　恭久、小路　竜一、谷　英紀、
早馬　由美子、平井　健一、松村　香代子、
三崎　昌史、吉田　慎一

（高知県）
内田　佳永、田内　芳仁、戸田　祐子、林　しの、林　勇樹、林　正和、山中　清香

（愛媛県）
木内　康仁

（兵庫県）
長澤　利彦、野口　三太朗
ツカザキ病院

（大阪府）
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、森　菊枝、山本　幸子、吉田　恭子

（滋賀県）
尾崎　志郎

（新潟県）
阿部　春樹、荒井　紳一

（東京都）
社本　真紀、中川　和美
日本眼科医会

（茨城県）
沼田　美紀

（鹿児島県）
田上　純真

（モザンビーク共和国）
宝山　晶子

（企業など）
（株）アーガス・ビー・エム・シー、
エイエムオー・ジャパン(株)、
（株）エムイーテクニカ、（株）オーヒラ、
参天製薬(株)、日本アルコン（株）、
（有）山口メディカル、
(株)リブドゥコーポレーション

（持参した医療機材など）

（ネパールで購入したインド製ナイフ 300 本）

アフリカ眼科医療を支援する会　定款

第１章　総則

名称

第1条　このNGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　英語名をAssociation for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　このNGOは、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町757番地
新潟大学医学部眼科学講座内

第２章　目的および事業

第4条　このNGOは、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと、および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことを NGO 設立当初の目的とする。

第５条　このNGO設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

第３章　会員

第６条　会員の種別

・正会員　このNGOの目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　このNGOの設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　１万円
・団体　年会費　　５万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

第４章　役員および選任等

第10条　このNGOに以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問２名以上６名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第11条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第12条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

第５章　総会

第13条　このNGOの総会は、正会員をもって構成する。

第14条　通常総会は、毎年１回開催する。

第15条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

第６章　会計

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

第７章　雑則

第１８条　このNGOの役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　　徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
副理事長：荒井紳一　　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　　東淀鋼材（株）会長
理　事　：長澤利彦　　ツカザキ病院
理　事　：沼田美紀　　山王台病院付属内科・眼科クリニック
顧　問　：阿部春樹　　新潟大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：塩田　洋　　徳島大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：福地健郎　　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：三田村佳典　徳島大学医学部眼科教授

（敬称略：50音順）

第１９条　この定款は2015年４月１日、一部訂正し、これを施行する。

（第１回アイキャンプのスタッフたちと記念撮影、2008年ムエ